

[B年] 受難節第2主日(2026年3月1日)**【旧約聖書日課】 エレミヤ書 2章1～13節**

- 1 主の言葉がわたしに臨んだ。
 2 行って、エルサレムの人々に呼びかけ
 耳を傾けさせよ。主はこう言われる。
 わたしは、あなたの若いときの真心
 花嫁のときの愛
 種蒔かれぬ地、荒れ野での従順を思い起こす。
 3 イスラエルは主にささげられたもの
 収穫の初穂であった。
 それを食べる者はみな罰せられ
 災いを被った、と主は言われる。
 4 ヤコブの家よ
 イスラエルの家のすべての部族よ
 主の言葉を聞け。
 5 主はこう言われる。
 お前たちの先祖は
 わたしにどんなおちどがあったので
 遠く離れて行ったのか。
 彼らは空しいものの後を追ひ
 空しいものとなってしまった。
 6 彼らは尋ねもしなかった。
 「主はどこにおられるのか
 わたしたちをエジプトの地から上らせ
 あれ荒野、荒涼とした、穴だらけの地
 乾ききった、暗黒の地
 だれひとりそこを通らず
 人の住まない地に導かれた方は」と。
 7 わたしは、お前たちを実り豊かな地に導き
 味の良い果物を食べさせた。
 ところが、お前たちはわたしの土地に入ると
 そこを汚し
 わたしが与えた土地を忌まわしいものに変えた。
 8 祭司たちも尋ねなかった。
 「主はどこにおられるのか」と。
 律法を教える人たちはわたしを理解せず
 指導者たちはわたしに背き
 預言者たちはバアルによって預言し
 助けにならぬものの後を追った。
 9 それゆえ、わたしはお前たちを
 あらためて告発し
 また、お前たちの子孫と争うと
 主は言われる。
 10 キティムの島々に渡って、尋ね
 ケダルに人を送って、よく調べさせ
 果たして、こんなことがあったかどうか確かめよ。
 11 一体、どこの国が
 神々を取り替えたことがあるのか
 しかも、神でないものど。

ところが、わが民はおのが栄光を
 助けにならぬものと取り替えた。

- 12 天よ、驚け、このことを
 大いに、震えおののけ、と主は言われる。
 13 まことに、わが民は二つの悪を行った。
 生ける水の源であるわたしを捨てて
 無用の水溜めを掘った。
 水をためることのできない
 こわれた水溜めを。

【使徒書日課】 エフェソの信徒への手紙 6章10～20節

10最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって
 強くなりなさい。11悪魔の策略に対抗して立つことができ
 るように、神の武具を身に着けなさい。12わたした
 ちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と
 権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手
 にするものなのです。13だから、邪悪な日によく抵抗し、
 すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるよ
 うに、神の武具を身に着けなさい。14立って、真理を帯
 として腰に締め、正義を胸当てとして着け、15平和の福
 音を告げる準備を履物としなさい。16なおその上に、信
 仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放
 つ火の矢をことごとく消すことができます。17また、
 救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言
 葉を取りなさい。18どのような時にも、“霊”に助けられ
 て祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、
 絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。19また、
 わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の神秘を大胆
 に示すことができるように、わたしのためにも祈って
 ください。20わたしはこの福音の使者として鎖につな
 がれていますが、それでも、語るべきことは大胆に話
 せるように、祈ってください。

【福音書日課】 マルコによる福音書 3章20～27節

20イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、
 一同は食事をする暇もないほどであった。21身内の人
 たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あ
 の男は気が変になっている」と言われていたからであ
 る。22エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あ
 の男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、
 「悪霊の頭の手で悪霊を追い出している」と言ってい
 た。23そこで、イエスは彼ら呼び寄せて、たとえを用
 いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出
 せよう。24国が内輪で争えば、その国は成り立たない。
 25家が内輪で争えば、その家は成り立たない。26同じ
 ように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、
 滅びてしまう。27また、まず強い人を縛り上げなけれ
 ば、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪
 い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略
 奪するものだ。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書 2章1～13節

- 1 主の言葉が私に臨んだ。
 2 行って、エルサレムの人々の耳に呼びかけよ。
 主はこう言われる。
 私は覚えている
 あなたの若い頃の誠実を
 花嫁の時の愛を
 種の蒔かれぬ地、荒れ野で
 あなたが私に従って来たことを。
 3 イスラエルは主に献げられた聖なるもの
 その収穫の初穂であった。
 それを口にする者はことごとく罪に定められ
 災いに見舞われる——主の仰せ。
 4 聞け、主の言葉を。
 ヤコブの家よ
 イスラエルの家の全氏族よ
 5 主はこう言われる。
 あなたがたの先祖は
 私にどのような不正を見つけて
 私から遠く離れて行ってしまったのか。
 彼らは空しいものの後を追ひ
 空しいものになり果ててしまった。
 6 彼らは尋ねもしなかった。
 「主はどこにおられるのか
 私たちをエジプトの地から導き上り
 荒れ野、荒れた穴だらけの地
 乾ききった死の陰の地
 誰一人通る者もなく
 人の住まない地に導かれた方は」と。
 7 私は、あなたがたを実り豊かな地に導き入れて
 その良い実を食べさせた。
 ところが、あなたがたは私の地に入ると
 そこを汚し
 私の所有の地を忌むべきものとした。
 8 祭司たちも尋ねなかった。
 「主はどこにおられるのか」と。
 律法をつかさどる者たちも私を知らず
 牧者たちは私に背き
 預言者たちはバアルによって預言し
 役に立たないものに従った。
 9 それゆえ、私はあなたがたと改めて争う。
 また、あなたがたの子々孫々に至るまで争う
 ——主の仰せ。
 10 キティムの島々に渡って、よく見よ。
 ケダルに人を送って、よく調べ
 果たして、こんなことがあったかどうか
 確かめてみよ。
 11 果たしてどこの国が
 神々を取り替えたりするだろうか
 しかも、神ならぬものと。
 ところが、わが民はその栄光を

役に立たないものと取り替えた。

- 12 天よ、このことに驚け。
 大いに、震えおののけ——主の仰せ。
 13 わが民は二つの悪をなした。
 命の水の泉である私を捨て
 自分たちのために水溜めを掘った。
 水を溜めることもできない
 すぐに壊れる水溜めを。

エフェソの信徒への手紙 6章10～20節

10最後に、主にあつて、その大いなる力によつて強くありなさい。11悪魔の策略に対して立ち向かうことができるように、神の武具を身に着けなさい。12私たちの戦いは、人間〔直訳→肉と血〕に対するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊に対するものなのだからです。13それゆえ、悪しき日にあつてよく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を取りなさい。14つまり、立って、真理の帯を締め、正義の胸当てを着け、15平和の福音を告げる備えを履物としなさい。16これらすべてと共に、信仰の盾を手に取りなさい。それによつて、悪しき者の放つ燃える矢をすべて消すことができます。17また、救いの兜をかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。18どのような時にも、霊によつて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。19また、私が口を開くときに言葉が与えられ、堂々と福音の秘義〔→神秘〕を知らせることができるように、私のために祈ってください。20私はこの福音のための使者として鎖につながれていますが、どうか語るべきときに、私が堂々と語るできるように祈ってください。

マルコによる福音書 3章20～27節

20イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。21身内の人たちはイエスのことを聞いて、取り押さえに来た。「気が変になっている」と思った〔別訳→人々が言っていた〕からである。22エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の方で悪霊を追い出している」と言っていた。23そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。24国が内輪で争えば、その国は立ち行かない。25また、家が内輪で争えば、その家は立ち行かない。26もしサタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。27また、まず強い人を縛り上げなければ、誰も、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・3月1日「受難節第2主日」の日課主題は「悪と戦うキリスト」。

・旧約日課は、「エレミヤ書」は、召命を受けた預言者が最初にエルサレムの人々に向けて告げた預言の箇所。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、最後の勧めとして悪に立ち向かうことを教える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「ベルゼブル論争」の箇所から。

旧約日課(エレミヤ2章より)

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」の第二に置かれた預言文書。本書の概論的解説は、前回資料「聖書と祈りの会 260218」を参照。

・日課箇所は、1章の「標題」および「召命自伝」に続いて告げられる「エルサレムの人々」に向けた預言句集で、エレミヤの活動前期の預言と解されるが、通説では1~25章を明確に特定の時代背景に結び付けて解するのは困難とされている。もっとも、3章には「ヨシヤ王の時代に、主はわたしに言われた」(3:6)という句が置かれており、少なくともこの句を含む1~4章が「ヨシヤ王の時代」(在位=前640~609年頃)の中でもエレミヤが預言活動を始めたこととされる「治世の第13年」(1:2)(=前627年頃)以降の後期の時代を背景として告げられていると解することはできる。この時代は、長年にわたってオリエント世界の覇権を握っていたアッシリアが急速に衰え、それに代わる覇権国としてそれまでアッシリアに服していたエジプトが活発に軍事行動を展開し始めるとともに、メソポタミアの新興国「新バビロニア(ナボポラッサル王→ネブカドネツアル王)」が東方の大国と組んでアッシリアを滅亡に追い込み、またアッシリアと行動を共にしていたエジプトに対しても圧倒的な優位を示していくようになる時代である。この時代に、ヨシヤ王は、それまでの宗主国アッシリアと断絶し、新興国バビロニアと同盟を組み、新世界秩序の一角を担う戦略に出たと考えられる。エレミヤらは、このヨシヤ王の新外交戦略の担い手として、ユダ王国内外に対する情報戦に従事するためにエルサレム宮廷に招集されていたと考えられる。ただし、この新戦略は、前609年にアッシリアへの援軍として進軍していたエジプト軍との先頭でヨシヤ王が戦死し、エジプトの傀儡王「ヨヤキム」が後継に立てられたことで挫折し、ヨシヤ王時代の親バビロニア政策を担っていたエレミヤらは非主流派に追いやられることになる。日課箇所は、ヨシヤ王存命中、エレミヤがエルサレム宮廷の主流派の立場で活動をしていた時期の預言として解され得る。

・ヨシヤ王の脱アッシリア・親バビロニア外交方針は、旧北王国イスラエル諸部族の動向にも影響を与えたと考えられる。前721年に北王国サマリア王権がアッシリアによって滅ぼされたとき、北王国を構成してい

たすべての部族が同地から排除されたわけではない。北王国は、ヤロブアム王(在位=前786~746年頃)没後すぐにイエフ王朝が崩壊し、戦国状態に陥っており、そのような国内情勢の中で迫ってきたティグラトピレセル王率いるアッシリアの攻勢に対して、早い段階でサマリア王権を見限り、アッシリアと手を組んだ部族があったと推認される。それらの諸部族は、サマリア王権滅亡後、サマリアに置かれたアッシリア総督に服しながら、自らの権力維持の方途を探り、その中には南王国ユダ・エルサレム王権に近づく部族が少なくなかったと考えられる。ヨシヤ王のエルサレム王権は、アッシリアの衰退が明白になる中で、それら諸部族を囲い込むために、自らが旧イスラエル王国の正統な継承国であるという政治宣伝を進めるようになったのであろう。その際、北部諸部族の権力維持において密接な関係が続けて来ていた北部各地の地方聖所をユダ王国の国家聖所であるエルサレム神殿の下に統合しようとした出来事が、列王記下23章に伝えられている祭儀改革であったと推認される。

・日課箇所は、明らかに「エルサレム」にすでに入り込んで来ている北部諸部族の人々、つまり「ヤコブの家…イスラエルの家のすべての部族」に向けて告げられている。北部諸部族は、北王国サマリア王権の滅亡に際して、アッシリアの祭壇を受け入れたと考えられる。南王国ユダが前8世紀、アッシリアに滅ぼされなかったのは、早い段階でアッシリアの祭壇を受け入れていたからである(王下16章)。ユダ王国は、それ以来、ヨシヤ王即位の頃まで、アッシリアの祭壇に服していたが、ヨシヤ王が脱アッシリア政策に転換したことでこれを廃した。日課箇所の預言は、北部諸部族にも脱アッシリアを明確にしてエルサレム王権に同調することを求めているのである。

使徒書日課(エフェソ6章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の5番目に置かれた書簡文書。パウロが二年ほど拠点を置いていたと考えられる「エフェソ」の教会共同体に宛てて著した書簡で、エフェソを離れた後、自らの消息を伝えるとともに、自分が指導してきた教会形成における要諦を確かめさせるために書き送った。

・日課箇所は、本書簡の最後に置かれた勧告で、端的に「悪」に立ち向かうべきことを勧めている。本書簡におけるパウロの基本姿勢は、キリスト者として古い生き方を捨てて神に造られた「新しい人」にふさわしい生き方に徹することにある。ただし、パウロは本書簡で、必ずしも旧約的ユダヤ的な言説を用いて勧めを語るのではなく、当時のギリシア・ローマ社会に広がっていた宗教観念を示唆する用語や概念を用いて記している。日課箇所も、「悪魔」を神に敵対する霊的勢力とする概念で語っているが、このような善悪二元論的な世界観は、必ずしも旧約本来の世界観ではなく、パウロが敢えて想定する読者に合わせて用いているものと考えられる。

福音書日課(マルコ 3 章より)

・日課箇所は、「ベルゼブル論争」と呼ばれる説話の一部で、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、それぞれに異なる文脈の中に置いている。おそらく、この伝承説話の位置づけが必ずしも明確でないまま、各福音書がそれぞれの編集意図に即して文脈や前後に配置する伝承を取捨選択しているものと考えられる。

・「マルコ」は、「ベルゼブル論争」を、身内の者たちが主イエスを取り押さえに来たという設定から始め(21 節)、その身内の者たち(母と兄弟たち)を差し置いて主イエスが自分の教えを聞く者たちを指して「わたしの兄弟、姉妹、また母」(35 節)と告げたという結末で枠づける中に、余計な伝承を付加せずに配置している。おそらく、「ベルゼブル論争」そのもので焦点とされている「どのようにして悪霊を追い出すのか」という論点には必ずしも関心が向けられておらず、この論争の中である種の「たとえ」として取り上げられている「内輪揉め」や「家の略奪」に関心が向けられている。

・21 節「気が変になっている」の原語はギリシア語「エクシステミ」で、原義は「外に立つ」。「心ここにあらず」という状態や「正常な行動ができない」という状態を指して用いられ、用例としては「驚かされて身動きできない」というような姿を指しても用いられる。他方で、新プラトン主義などの哲学思想では肉体的な束縛から自由になる状態を表す用語として用いられ、日本語では「脱自(解脱)」などと訳される。いずれにしても、この用語で表されるのは、良くも悪くも「普通」ではない言動をしている者の状態を指しており、一般的には好意的な評価ではないが、福音書は主イエスの精神的な特異性を認めて、この身内の者たちの発言を敢えてこの用語で伝えているとも考えられる。

・22 節「ベルゼブル」は、列王記下 1 章で繰り返し取り上げられる「エクロンの神バアル・ゼブブ」から取られた異教の神(悪神!)の名とされる。列王記に出て来るこの神の名は、本来「気高き主」という意味の「バアル・ゼブブ」であるものを、「蠅」を意味する「ゼブブ」に置き換えて揶揄しているので、これが一般化して悪神の名として用いられる場合も「ベルゼブブ」となるのが自然であるが、福音書では「ベルゼブル」と本来の名に近い音で現れている。

・22 節「悪霊」の原語はギリシア語「ダイモニオン」で、原義は「(霊的な)力」。「ダイナミイト」などの語源。「悪魔(ディアボロス)」が実体的な存在を示唆するのに対して、「悪霊」は現象を示唆する用語。

・23 節「サタン」は、ヘブライ語「サターナ」の音訳。旧約で「サターナ」は、「サタン」と訳されるほか、「妨げる者」(民数記 22:22 など)とも訳され、御使いの一種として描かれる存在であるから、必ずしも神と敵対する存在ではない。「マルコ」では、「荒れ野の誘惑」などで注意深く用いられている。

来週の誕生日 (3 月 1 日～7 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-128「悪は罪人の」(= II 110)は、16 世紀スイス・ジュネーブの教会改革を指導した J.カルヴァンがフランス語の詩編歌 36 編として作詞。曲は、1525 年発行のストラスブル聖歌集所収のドイツ語詩編歌 36 編のためにマテウス・グライターが作曲。同じ曲が 294 番でも用いられているが、『讃美歌 21』では異なる記譜で用いられてきたとおりに採用。
- ・21-280「馬槽のなかに」(= I 121)は、20 世紀日本を代表する讃美歌学者であった牧師・由木康の代表作。初期に、「イエスの神性はその人性のうちに包まれ、それを通して輝いている」との神学的確信を得たことに基づいて著した詩を、1931 年版『讃美歌』で歌詞として採用。曲は、由木と同時代に東北学院、明治学院等で教鞭を執った教会音楽家・安部正義の作。
- ・21-72「まごころもて」(= I 202)は、中世の神学者トマス・アキナスの作とされるラテン語聖歌。

21-285「高き山の上」

O Wondrous Type (O Wondrous Sight)

1. O wondrous type! O vision fair / Of glory that the Church shall share, / Which Christ upon the mountain shows / Where brighter than the sun He glows!
2. From age to age the tale declare / How with the three disciples there, / Where Moses and Elias meet, / The Lord holds converse high and sweet.
3. With shining face and bright array, / Christ deigns to manifest today / What glory shall be theirs above / Who joy in God with perfect love.
4. And faithful hearts are raised on high / By this great vision's mystery; / For which in joyful strains we raise / The voice of prayer, the hymn of praise.
5. O Father, with the eternal Son, / And Holy Spirit, ever One, / Vouchsafe to bring us by Thy grace / To see Thy glory face to face. / Amen.

21-72「まごころもて」

Adore devote

English translation

1. Godhead here in hiding, whom I do adore, / Masked by these bare shadows, shape and nothing more, / See, Lord, at your service low lies here a heart / Lost, all lost in wonder at the God you are.
2. Seeing, touching, tasting are in thee deceived: / How says trusty hearing? that shall be believed: / What God's Son has told me, take for truth I do; / Truth Himself speaks truly or there's nothing true.
3. On the cross your godhead made no sign to men, / Here your very manhood steals from human ken: / Both are my confession, both are my belief, / And I pray the prayer of the dying thief.
4. I am not like Thomas, wounds I cannot see, / But can plainly call you Lord and God as he; / Let me to a deeper faith daily nearer move, / Daily make me harder hope and dearer love.
5. You are our reminder of Christ crucified, / Living Bread, the life of us for whom he died, / Lend this life to me then: feed and feast my mind / With your sweetness that we all were meant to find.
6. Bring the tender tale true of the Pelican; / Bathe me, Jesu Lord, in what your bosom ran / Blood whereof a single drop has power to win / All the world forgiveness of its world of sin.
7. Jesu, whom I look at shrouded here below, / I beseech you send me what I thirst for so, / Some day to gaze on you face to face in light / And be blest for ever with your glory's sight. Amen.